

『翻訳老乞大・朴通事』に存在する注音・用字上の内部差異について

遠藤 光暁

1. はじめに

竹越孝氏の『『翻訳老乞大』における「匹」「疋」字の分布』、*KOTONOHA*, 27,2005年『老乞大』諸本における「匹」と「疋」の分布状況をつぶさに調査し、『翻訳老乞大』において上巻では「匹」、下巻では「疋」が優勢であることを示し、上・下巻とで刊行の経緯や状況が異なる可能性を示唆しておられる。

私も以前類似現象に逢着し、1981年12月に東京大学に提出した修士論文『『翻訳老乞大・朴通事』の声調について』に記したことがあった。この修論の中心的論旨は中国語で書きまとめて「『翻訳老乞大・朴通事』里的漢語声調」『言語学論叢』13輯、1984年(遠藤光暁『中国音韻学論集』白帝社、2001年にも収む)として発表してあるが、周辺的な内容については公刊していない部分がある。今回、竹越氏の論考に触発され、それに関連する論述をここに発表し、近来『老・朴』に対する精緻にして系統的な研究を推進しつつある竹越氏や同学の士の更なる考究に資したいと思うようになった。

関連するのは主に修論の注9に記した内容なのだが、そこだけ抽出すると理解しづらいので、それに対応する本文部分(「1.3.板本について」の末尾)をまず下の第2節に掲げ、それに対する注7,8,9を第3節に掲げることとする。

2. 本文部分

さて、今実際に利用できるのは次の影印本である：

- i. 『朴通事・上』、慶北大学校大学院国語国文学研究室、1959年。
- ii. 『老乞大・上』、中央大学校出版局、1972年。
- iii. 『老乞大・下』、仁荷大学校出版部、1975年。
- iv. 『翻訳老乞大・朴通事』、原本影印韓国古典叢書(復元版)III, 諺解・訳語類, 大提閣, 1974年。

このうちivは、i・iiと全く同じ本を影印したものである。この研究では、iiiとivの影印本を元にしたが、途中でivがことわりなしに加筆しているのに気づき、⁽⁷⁾ iを参照して一部訂正した。これら戦後に発見された声点本を韓国では『翻訳老乞大・朴通事』と呼び習わしているので、この論文でもその慣例に従う。⁽⁸⁾

それでは、この『翻訳老乞大・朴通事』を崔世珍の原本と同一のものであると看做してよいだろうか?この点については疑問の余地があるが、⁽⁹⁾ 今さしあたり所与の資料は発見された分の板本と、『四声通解』付載の「翻譯老乞大朴通事凡例」等だけであるので、それらを元に研究を進める他はない。結果的には、少なくとも声調に関する限り、

声点と「凡例」の記述の間には矛盾する点が認められないので、この研究の拠った資料は崔世珍の旧を伝えるものと考えて大過ないであろう。

3. 注の部分

7) 気づいた限りでは、『朴通事・上』の 41,79,93,94,102,118 頁。

8) そう呼ぶ根拠は、『四声通解』に付載されている「翻譯老乞大朴通事凡例」という題にあるようであるが、“翻譯”というのは“老乞大朴通事”を修飾しているのではなく、それを目的語にとっていて、それら全体が“凡例”を修飾しているものと私は考える。これを『老朴集覧』・「凡例」で「反譯凡例」と略称していることがその裏づけとなる。それでは崔世珍は自分の諺解を何と呼んでいたのだろうか。『四声通解』・「序」では「二書諺解」、『老朴集覧』・「凡例」では「両書諺解」と呼んでいる。又、発見されたテキストの表紙には「老乞大」・「朴通事」とだけ書かれている。恐らくこれは総称として言う場合であり、「諺解」と言う時は、特にハングル標音・朝鮮語訳の部分も含めて指しているのであろう。なお「翻譯老乞大朴通事凡例」の中で、時折「今之反譯」という言葉が出てくるが、これはハングル標音の部分、時に右側の標音のみを指すものと考ええる。結局、この板本も『老乞大諺解』・『朴通事諺解』と呼ぶべきことになるが、それだと 17 世紀の板本とまぎらわしくなってしまう。それを避けるためにも通用の名称に従うことにした。

9) これについては、少なくとも i と ii・iii を分けて論ずる必要がある。i (及び『老朴集覧』)が乙亥鑄字本であるのに対して ii・iii が木板本であることから、南広祐氏は、ii・iii の解題で、『老乞大上・下』でもこの木板本の前に乙亥鑄字本があったのではないかと推定しておられる。この研究でも、i と ii・iii の違いが一部で見出された。

その 1 つは入声の中で「閣各索卓脉活」の左側音及び「摘」の右側音に 2 種の標音があつて、その分布が i と ii・iii の間で異なっていることである：

| | 閣 | 各 | 索 | 卓 | 脉 | 活 | 摘 |
|--------|---------|---------|----------|----------|-----------|-------------|----------------------------------|
| | ge' gav | ge' gav | syi' sav | jav joav | myi' mai' | hhue' hhui' | je ² jai ² |
| ii 老上 | 0 3 | 0 3 | 0 0 | 0 3 | 0 0 | 0 0 | 0 1 |
| iii 老下 | 0 1 | 1 5 | 0 1 | 0 1 | 0 2 | 2 4 | 1 0 |
| i 朴上 | 6 0 | 5 0 | 1 0 | 3 0 | 1 0 | 7 0 | 1 0 |

このうち「閣各索卓脉」などは『老乞大上・下』に現れる方が規則的な標音である。

もう 1 つは漢字の異体字の現われ方にかたよりのある場合である。今まで気付いた限りでは、「来麤稱」の 3 字が次のように 2 種の字形で現われる：

| | 来 來 来/來 | 麤 麤 | 稱 秤 |
|--------|------------|-----|-----|
| ii 老上 | 48 114 42% | 1 0 | 1 0 |
| iii 老下 | 27 55 49% | 4 1 | 8 5 |
| i 朴上 | 13 124 10% | 0 3 | 0 1 |

3番目の対は、『老乞大・下』の130頁以前の8例がすべて「稱」、137頁以後の5例がすべて「秤」となっている。

この事実はどう考えたらよいだろうか。あるいは崔世珍の原本でも既にそうであったとも考えられるが、いずれにせよ、i・ii・iiiが完全に同じでない場合がわずかではあるが存在することは確かである。

又、中村1961では、「凡例」の第8・9条に該当する事実がiに見出されないことが述べられている。その他、山川1977は、『老朴集覧』が「凡例」では「單字累字之解只取老乞大朴通事中所載者爲解」とあるのに、奎章閣叢書の『老乞大諺解』・『朴通事諺解』には見あたらない字を注解していることを指摘し、漢文本文については『朴通事諺解』上と『翻譯朴通事』上とではほとんど違いのないことから、『翻譯朴通事』上が崔世珍の原本であるとする通説に疑問を提出している。

4. 補説

前節に掲出した表の中の注音はもとはハングルで記してあったが、ここでは河野式転写によってローマ字で表示しておいた。「卓」の注音のjで示したハングルはいずれも正歯音を表す右角が長いほうなので、jの上に^vがついた字で転写すべきなのだが、ふつうのフォントには用意されていないので、単にjとしておいた。また、「閣各索卓脉活」の注音はいずれも一点がついているのだが、欄が足りなかったため、上の表中では省略してある。

さて、第2・3節に掲げたものは1981年に記したままなので、現在では補正すべき点がある。

まず、菅野裕臣先生のご教示によると、いわゆる『翻譯朴通事』の原本には紙を貼って字を校正してある箇所があるという。また、それに対する初めての影印本・iであるが、福井玲氏の教示によるとこの段階ですでに影印時に修正が加えられている箇所があるという。この原本は韓国国会図書館現蔵で、国宝に指定されているので、容易なことでは目撃できないであろうが、殊に声点については原本に就いて照合するのが理想的である。

また、中村1961が「凡例」の第8・9条に該当する事実がいわゆる『翻譯朴通事』に見られないとする点についてここで少し論じておこう。

「翻譯老乞大朴通事凡例」の第8条の前半は以下の通り：

「一、正俗音 凡字有正音，而又有俗音者。故『通攷』先著正音於上，次著俗音於下。

今見漢人之呼，以一字而或從俗音，或從正音；或一字之呼有兩三俗音而『通攷』所不錄者多焉。今之反譯書正音於右，書俗音於左；俗音之有兩三呼者則或書一音於前，又書一音於後，而兩存之。…」(一つ，正音・俗音。一般にある字には正音があり，また俗音があるものもある。そこで『四声通考』ではまず正音を上に掲げ，その次に俗音を下に掲げている。いま中国人の発音を観察するに，同一字なのに俗音によっていることもあれば，正音によっていることもあり，あるいは同一字の発音に二・三の俗音があり，『四声通考』が記録していないものも多い。この「翻訳」〈実際にはハングル転写のみを指し，朝鮮語訳は含まないであろう〉では正音を右に書き，俗音を左に書く。¹ 俗音で二・三の発音があるものは前〈の箇所〉ではある音を記し，後〈の箇所〉では別の音を記して，いずれも残しておいた。…)

問題になるのは，a)「以一字而或從俗音，或從正音」と b)「俗音之有兩三呼者則或書一音於前，又書一音於後，而兩存之。」の二点であるが，私は上掲の第 3 節の表に掲げた「摘」が正に a)の例であり，「閣各索卓脉活」が b)の例であると考え。つまり，同一箇所前後して俗音・正音ないし複数の俗音を挙げるというのではなく，全体を通して前の箇所である字音を出したり後の箇所では別の字音を出す，ということだと解釈すればこの記載が宙に浮くことがなくなるわけである。

また，第 9 条は以下の通り(中村 1961a が提起した問題を含む前半部分のみを引く)：『通攷』「賁」字音 jy，註云：「俗音 jyz，韻内齒音諸字口舌不變，故以 z 為終聲，然後可尽其妙。」今按：齒音諸字若從『通考』加 z 為字則恐初學難於作音。故今之反譯皆去 z 聲，而又恐其直從去 z 之聲則必不合於時音。今書正音加 z 之字於右[これを「左」に校訂する]，庶使學者必從正音用 z 作聲然後可合時音矣。…」(『四声通考』は「賁」という字に jy という注音をつけ，その注に次のように言っている：「俗音は jyz，この韻の中の齒音声母の諸字は調音が変わらない(即ち声母の齒音の要素を伴って韻母も発せられる)ので，z を韻尾としてこそその微妙さが現れるのである。」ここでコメントをつけると，齒音の諸字はもし『四声通考』に従って z をつけて字を構成すると初学者が発音しづらくなることを恐れる。だからここでの訳音はいずれも z を取り去ってあるが，一方またそのまま z を取り去った発音によると必ずや現在の発音と合致しなくなることも恐れる。そこで正音に z を加えた字を左に書き，学習者が必ず正音に従って z を用いて発音し現在の発音に合致するよう希望している。)

『四声通考』の作者・申叔舟はハングル作成にも参与したと思われる一流の音韻学者であるが，『中原音韻』の支思韻に相当する韻母が舌尖母音であることを鋭敏に捉えており，その舌尖音の要素を日母を表す文字 z を終声につけることによって表現しており，これは現代の音声学からしても優れた表記法であると考えられる。

しかし，崔世珍は「翻譯老乞大朴通事凡例」第 3 条で「在左者即『通攷』所制之字；

¹ この箇所の「今之反譯書正音於右，書俗音於左」の「右」「左」をおのおの逆で校訂する説があるのだが，私はこのまま読む。

在右者今以漢音依国俗撰字之法而作字者也。…」(左にあるのは『四声通考』の定めている転写であり, 右にあるのはここで中国音に基づき朝鮮で普通に書写に使っている方法によって転写したものである。…)と言うように, 右側音は当時の固有朝鮮語で常用されているハングルの綴りのみに限定しようとしている。しかし, 例えば声調などにしても右側音だけだと陰平と去声がいずれも一点となり区別がつかなくなってしまうので, より精密な表記として左側音も併記し, 初学者への分かりやすさと注音の厳密さを両立させている。

『四声通考』は今では亡びていて見ることはできないが, その元となった『洪武正韻訳訓』は発見されており, 問題の第9条に記された止撰開口歯音字の発音表記に関してもその俗音が『翻訳老・朴』の左側音(遠藤 1990, 55-59 頁参照)とほぼ一致することが確認できる。

中村 1961 (124 頁)は第8・9条が『老朴集覧』に関する記述である可能性を想定するものの, その後『老朴集覧』の完本が発見されたがそのような事実は認められない。²

また山川 1977 が提起した問題, 即ち『老朴集覧』の「単字解」「累字解」に奎章閣叢書の『老乞大諺解』・『朴通事諺解』に見当たらない字が解説されている点については元本『老乞大』が発見され, そこに見えることが田村祐之氏の一連の研究³ によって明らかになりつつある。

その他, 第2, 3節で引用した記述にはより系統的な補訂を施す必要があることが今回読み直してみて明らかになったが, そのためには相当の研究をなさねばならないので, 小文ではここまでに留めておく。

引用文献

遠藤光暁 1990. 『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』, 好文出版。

中村完 1961. 「影印「朴通事上」付金思燁解題」(書評), 『朝鮮学報』, 18, 121-32 頁。

山川英彦 1977. 「《老朴集覧》覚え書」, 『名古屋大学文学部研究論集』, LXX, 61-72 頁。

(補)

中村完 1967. 「李丙疇編校『老朴集覧考』」, 『朝鮮学報』, 45, 118-124 頁。

² 中村1967(122頁)参照。この点竹越孝氏の教示による。

³ 田村祐之 2001. 『老乞大』と『老朴集覧』の関係について—ならびに『朴通事』成立過程についての考察, 中国近世語学会第16回研究総会発表論文, 於筑波大学, 2001年5月27日; 田村祐之 2004a. 『老朴集覧』と『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』の成立過程について, 中国近世語学会第19回研究総会発表論文, 於関西大学, 2004年5月30日; 田村祐之 2004b. 『老朴集覧』と『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』の成立過程に関する一考察, 科学研究費特定領域研究「東アジア出版文化の研究」B班研究会「善本」と「底本」談話会(第二回)発表論文, 於東北大学, 2004年12月18日; 田村祐之(2011) 「老乞大集覧」所収語彙と日本『老乞大』『翻訳老乞大』用例対象(マ), 日本学術振興会科学研究費報告書